



花と会話する 老婦人



川崎ゆきお

初夏の夕暮れ時、三村の前を老婦人が歩いている。陽射しは緩み、歩きやすい時間帯。三村はこの時間、散歩する。前を歩いている老婦人もそうだろう。歩道の左は車道。右は小学校の敷地。粗い網フェンスが続いている。

まだ陽射しはあるため、歩道に行く人は歩道の左側を歩く。並木が日陰になっているためだ。

前をゆく老婦人が急に進路を変えた。交差する道はない。老婦人は右側の陽射しのある側へ出た。そこは校庭の網フェンスだ。それに近付き、そして立ち止まり、前屈みになる。三村は気分でも悪くなったのかと思ったのだが、声が聞こえてきた。

「はいはいお元気で、なによりです。はいはい私も達者ですよ。昨日もお話ししましたねえ」

老婦人の前には誰もいない。

よく見ると、網フェンスからアジサイがはみ出している。それを見るために老婦人はかがんでいるのだ。

つまり、この人は花と話していることになる。

「では、お元気で。また明日お会いしましょうね」

三村は老婦人に近づく。

「おや、こちらの子もいましたか。また明日」

老婦人は、別の花にも話しかけたようだ。

「あのう」思わず三村は声をかけてしまった。

「はい」

「花と話されているのですか」

「はい」

「花から何か聞こえてくるのですか？」

「うんと近付かなければ駄目ですよ。耳をうんと寄せないと」

「それで、聞こえるのですか」

「そんな気がします」

「ああ、なるほど」

「では、花からは声は聞こえてこないのですね」

「花が喋り出したらうるさいじゃないですか」

「まあ、そうなんでしょうが」

「でも、何かお喋りをしているのは聞こえるんですよ」

「はい」

老婦人は、一人でお花さんごっこをしているのだろうか。

三村は、そのまま散歩を続けた。そういえば三村は花とは会話しないが、雲と会話する。確かに雲が喋ればうるさいだろう。雷のようなものだ。

それに近いことを、あの老婦人もやっていたのだろう。

了